

## 次世代の学び・国際協働オンライン学習 (COIL)

信州大学医学部 国際医学研究推進学教室, 国際交流推進室

田中直樹

## I はじめに

「大学教育の国際化」が叫ばれて久しい。一方、2020年からの新型コロナウイルス感染症の世界的拡大により、学生が海外の大学で学んだり、海外からの研究者・留学生を受け入れて直接交流する機会も激減してしまった。このような状況を踏まえ、国際協働オンライン学習 (Collaborative online international learning, COIL) が注目を浴びている。本稿では、COIL の概念と実践例、今後の課題について紹介したい。

## II COIL とは

21世紀に入り、人材・情報のグローバル化がさらに促進された。社会問題は多様化・複雑化し、自国だけでなく地域や世界にも課題が及ぶようになった。地球温暖化はその代表である。それに伴い、大学教育でも、従来の講義のような知識伝達だけではなく、海外の学生と力をあわせて、主体的に問題を解決する能力を養う機会が求められるようになった。海外の学生と力をあわせる、といっても、講義室で一堂に会して話し合うことは不可能である。日本にいながらにして、海外の学生とリアルタイムでつながり、ともに学習する様式がCOILである<sup>1)2)</sup>。情報通信技術 (ICT) の進歩により、若干の創意工夫で、誰でも比較的簡単にCOILを行えるようになった。コロナ禍による海外渡航・対面授業の停止は、皮肉にもCOIL普及への追い風になっている。

## III COIL の学習モデル

COIL の概念を提唱した、ニューヨーク州立大学におけるモデルは、以下の3パートからなる。① Ice breaking: 背景の異なる学生とグループを形成する。グループメンバーが打ち解けて、お互いを知る。② Comparison & Analysis: あるテーマに対して、お互いの国の現状や自分達の考え方を説明・比較し、類似

点や相違点を解析する。③ Collaboration & Creation: グループ内で分析・考察を行う。グループ間でも討論し、フィードバックを受けて、新たに学んだことを発信する。

外国の学生と一緒に (C)、オンラインで (O)、英語で (I)、教員の講義や学生の発表を聞く形式は、COIL とは言わない。COIL の L は Lecture ではなく Learning なので、海外の学生との混成グループの中で、学生同士があくまで主体的に調査・討論し、意見をまとめることが肝要である。

またCOILは「英語を学ぶ」のではなく、「英語で学ぶ」機会なので、臆せず英語で話す勇気が大切である。またCOILでの学習には絶対的な正解はないので、お互いの立場や考え方の違いに気付き、刺激を受けるだけでも十分効果が得られたと言えるだろう。

## IV 信州大学医学部でのCOIL実践例

信州大学医学部では、さらなる国際化を目指した新たな取り組みとして、2021年秋より、医学科1年生120人全員を対象にCOILを開始した。希望者だけでなく、全員に海外の医学生と話す機会を提供したかったため、課外時間ではなく医学概論Iの授業枠内で行った。その時の様子を具体的に紹介したい。

1年生120人を6-7人毎のグループに分け、そこに海外協定校の学生が参加して、混成グループを作った。COILはリアルタイムにつながるため、時差の問題は無視できない。また相手の英語が聞き取りやすい、日本人の英語に比較的寛容な地域を考え、タイ マヒドン大学医学部、インドネシア ディポネゴロ大学医学部の両協定校にご協力頂いた。

今回のCOILのテーマを、「コロナ禍における大学生活の変化」と定めた。各グループはメンバーの自己紹介とともに、“Improving online well-being”, “Academic engagement”, “Student bonding activities”の小テーマについて、日本や信州大学での現状を



図1 インドネシア ディポネゴロ大学医学部 2年生との COIL

- A：第1・2講義室にグループ毎で集まり、COILを行った。各自のラップトップやスマートフォンでも画面を見てもらった。
- B：ラップトップにマイク付きカメラ、スピーカーを接続した。
- C：インターネット接続不良による中断があったが、学生同士、楽しく交流できた。
- D：COIL 1週間後の発表会の様子。

PPT 数枚にまとめた。PPT のチェック、司会者や発表者などのグループ内での役割分担の決定、参加学生のメールアドレスの共有など、学生と教員との事前準備やコミュニケーションは、COIL を円滑に進めるためにも必要である。

実際の COIL は、各グループが講義室に集まり、ノートパソコンの画像を見ながら、協定校の学生と話す形で行われた (図 1 A)。機材はいたってシンプルで、メインのノートパソコンにマイク・スピーカーを接続しただけである (図 1 B)。画面共有で事前に作成した PPT を見ながら、お互いの状況を紹介し、比較を行った。意見交換の終了時間は学生に任せたが、全てのグループで60分以上話していた。またラインを交換したり、会話が弾むグループも見られた (図 1 C)。教員はインターネットの接続中断や音声不良の対応を行った。話が盛り上がっていても、接続が切れてしまうと、フラストレーションがたまってしまう。講義室をはじめとした、医学部のインターネット環境の整備は、喫緊の課題である。

なかなか難しいが、「話せて楽しかった」だけで終わらせないことが大切だと感じている。そこで、各グループで準備した PPT に COIL で学んだことを肉付けし、発表会で学びを共有した。1年生全員、そして協定校の学生にむけて、各グループ6分、英語でプレゼンテーションを行った (図 1 D、図 2)。

事後アンケートでは、8割以上の学生が「積極的に参加できた」「海外の学生との交流を楽しめた」「協定校に興味を持った」との感想を持ち、概ね好意的であった。一方、「時間が足りない」「1回だけでなく、複数回 COIL を行いたかった」「他の国の学生も入れてほしかった」「インターネット接続が悪い」などの意見も寄せられ、今後の改善点であると考える。また「タイやインドネシアの学生は、なぜあんなに英語が上手なのか」と驚いていた学生も多かった。普段の学生生活、メールや SNS のやり取りでは体験できない、新鮮な衝撃を受ける機会にもなった。

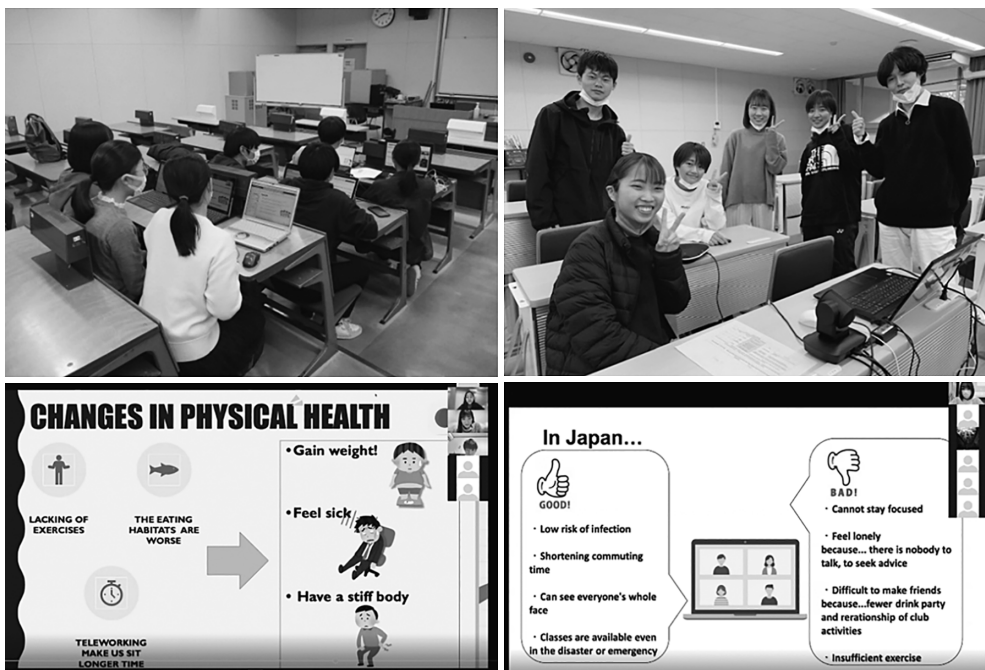


図2 タイ マヒドン大学医学部 1年生とのCOIL  
 上段：COIL 当日の風景。  
 下段：COIL の成果の発表。

## V 最後に

暗中模索しながらのCOILであったが、収穫も大きかった。今後は課題を克服し、全学生参加型のCOILや学年横断的なCOILを信州大学医学部でもさらに充実させていきたい。このような国際医学教育を通して、一人でも多くの学生に、海外の医学生との交流や海外留学に興味を持ってほしいと願っている。そして、医学部5、6年生次での海外研修への参加学生、大学院在籍中や学位取得後に留学する人材を増やしていけば、信州大学医学部のグローバル化を推進する力になっていくと期待する。COILに関心のある読者の方は、私

(naopi@shinshu-u.ac.jp)までご一報頂けますと幸いです。

謝辞：COILに関して、日頃からご指導頂いている信州大学グローバル化推進センター 仙石祐先生、COIL実施にご協力頂いた、医学教育研修センター 森 淳一郎先生、学務・臨床研修グループ 松崎博文さん、中島 真さん、国際交流推進室 平澤真由美さん、小菅美佳さんに深謝いたします。今回の試みは令和3年度学内版GPに採択され、支援を受けています。本稿の内容は、SU-COIL プロジェクト FD セミナー（2021年11月17日）にて信州大学全体に紹介しました。

## 文 献

- 1) 末松和子, 秋庭裕子, 米澤由香子 編著：国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ. 東信堂, 2019
- 2) 池田佳子：大学教育の国際化への対応. 関西大学出版部, 2019